

ーネットを活用しての共同研究が始まっている。今後は日本在住の海外の研究者の助けを借りつつ、日本発信の国際的な共同研究や持続的に情報を交換しあうような場が必要ではないか。以上のようなリプライがなされた。

今回のパネルで明らかにになった課題に応えるため、今後も共同研究を継続していきたい。

移民と宗教を結ぶホームランドへのノスタルジア

代表者 藤野 陽平

コメンテータ 三木 英

司会 白波瀬達也

ハワイ日系宗教における現地適応と「日本」

高橋 典史

本発表の前半では、理論的な整理を行うことにより、本パネルの試みの要点を説明した。その次に、発表者がこれまで研究を進めてきたハワイを事例に取り上げて、現地の日系仏教関係者たちの〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉に関わる言説を考察することにより、移民の宗教が供給する集合的なアイデンティティの変遷の一例を、世代の問題に着目しつつ示した。ハワイの日系移民は一世紀をこえる歴史を有しており、現在ではホスト社会にかなりの程度適応しているといえる。そのた

め、本発表では、本パネルで論じていく多様な移民の宗教を考えるうえでの出発点となる事例として、ハワイの日系仏教の日系移民との関わりの変遷を提示したのである。

そもそも、移民の宗教とは、制度においては宗教活動のほかに、移民たちの生活上の互助機能や文化機関等としての役割を担い、意味に関しては聖俗両面に関わる移民の集合的アイデンティティの資源となりうる存在である。一方、移民とは、〈ホームランド〉から切り離された人びとであるため、〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉を抱えつつ、新たなアイデンティティの模索を強いられる状況に置かれる。それゆえ本パネルでは、宗教が、異国においてそこに集う移民たちに〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉という点で、いかなる意味を提供しているのかを検討することをテーマに掲げた。

さて、一九世紀末以降、日本からの移民を追うように数多くの日系宗教教団がハワイへ渡っていった。なかでも浄土真宗本願寺派を代表とする日系仏教は、ハワイの日系社会における宗教の中心的な位置を占めていった。こうした日系仏教の寺院は、第二次世界大戦以前の日系移民にとっては、一般的な宗教活動だけでなく、日本の言語文化を提供する機関としても重要な役割を担った。

布教開始当初、キリスト教勢力に対抗心を抱いていた日系仏教は、日本国内の延長線上で、「海外同胞」である仏教徒を救うという姿勢で臨んだ。しかし時代が下り、アメリカ社会で排日の風潮が高まってくると、日系仏教にも現地適応、すなわち「アメリカ化」の志向が生まれていく。しかし、いわゆる排日

移民法の施行(一九二四年)以降の日米関係の悪化や、日本国内のナショナリズムの高まりの影響により、在米日系社会の状況は変化していった。そうしたなかで日系仏教は、アメリカ市民である日系二世仏教徒を、日米の「架け橋」となる存在として重視するようになっていった。

日米間の戦争中、日系仏教は敵国日本との関係を疑われたため、宗教者たちは強制収容所に送り込まれ、寺院の活動も停止させられた。大戦後、活動を再開した日系仏教は、日系二世が中心となってアメリカ化を進めていき、戦前のように「ホームランド」とのつながりを前面に打ち出さなくなっていく。かくして、大戦後の日系仏教は、日系アメリカ人のエスニック・チャーチとして存続していった。ただし、大戦後の世代交代の影響は大きく、若い世代が増加していくにつれて信仰継承の困難に直面している。だがその一方で、三世以降の一部には、エスニック文化である仏教に関心を持つ者も生まれている。

本発表の事例を見ても、実体としての「ホームランド」についての直接的な記憶があった日系一世、第二次世界大戦以前に一世たちから故国について詳しく教えられて育ち、日本への旅行や留学などで滞日経験を持つ者も多かった二世、大戦後に「アメリカ人」として成長した三世以降の世代では、それぞれが抱く「ノスタルジア」は異なっている。それゆえ、移民とその子孫たちの「ホームランド」への「ノスタルジア」を通じた宗教への関わりには、世代間で大きな差異があることは看過できない問題である。

日本人妻が出会った故郷

——台湾の日本語教会と高齢者施設にて——

藤野 陽平

戦前戦後の混乱から、本人の意思に関わらずその後も国外で暮らすこととなった日本人は少なくない。台湾にはそうした流れで今も日本人妻達が暮らしているが、現在キリスト教系の団体が彼女たちのケアを行っている。本発表では台湾において日本をとりまく環境を確認し、彼女たちにとって故郷である「日本」とは何であり、それにキリスト教がどのように影響しているのかについて考察した上で、移民と宗教研究の議論に位置づける。

事例として玉蘭荘という日本語で運営されるキリスト教系のデイケアセンターと、台湾基督長老教会の国際日本語教会という日本語教会に集う日本人と台湾人を対象とする。前者は日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)の医療宣教師が日本人妻へのケアを兼ねて、日本語の「聖書と祈りの会」を始め、これを前身として、日本語によるキリスト教を基礎としたデイケアセンターとして発展し、現在に至っている。後者は台湾に暮らす日本人や、日本統治期に日本教育を受け日本語リテラシーの高い「日本語族」と呼ばれる台湾人が、日本語で礼拝することを目的に設立された教会である。

こうした日本語を提供する場に集う日本人妻は来台の経緯によつて三つに分類することができる。第一に戦前に台湾へ移住し台湾人と結婚しそのまま定住した場合、第二に戦前に日本で台湾人と結婚し戦後移住した場合、第三は戦前に夫婦で満州等